

十九世紀の広東語(4)Yes/no 疑問文

竹越美奈子

Yes/no 疑問文の変遷——十九世紀の広東語で用いられた形式と、それがどのような経過を経て現在の形になったのか——については、すぐれた先行研究<sup>1</sup>があるので、今回はこれを紹介したい。

—

現代広東語の Yes/no 疑問文には以下の形式がある。

I. ma 疑問文

- 1) 你去嗎？（あなたは行きますか）
- 2) 你去外國嗎？（あなたは外国へ行きますか）

II. meih 疑問文

- 3) 你去過香港未呀？（あなたは香港へ行ったことがありますか）
- 4) 食咗飯未呀？（もうごはん食べましたか）

III. A-not-A 疑問文

- 5) 你去唔去呀？（あなた行きますか）
- 6) 你去唔去外國呀？（あなた外国へ行きますか）
- 7) 你想唔想去外國呀？（あなたは外国へ行きたいですか）
- 8) 你知唔知佢想去外國呀？（彼が外国へ行きたいか知っていますか）
- 9) 你希唔希望去外國呀？（あなたは外国へ行くことを希望しますか）

meih 疑問文は文末に“未”をつけて経験や動作の完了を問うもので、動詞は経験を表す助詞（“過”）や完了を表す助詞（“咗”、普通話の“了”に相当）を伴うことが多い。また、ほぼ義務的に“未”のあとに文末助詞の“呀”を伴うが、この“呀”の機能は語気を和らげることである。

A-not-A 疑問文は肯定形と否定形を繰り返して<sup>2</sup>文末に“呀”を付けたもの<sup>3</sup>であり、動詞が目的語を伴う場合、

A:[VO]+唔[VO]

B:[VO]+唔[V]

<sup>1</sup> Cheung, H.N.S.(2001) The Interrogative Construction: (Re)constructing Early Cantonese Grammar. *Sinitic Grammar*. New York: Oxford University Press.pp.191-231.

<sup>2</sup> 広東語の否定の副詞は“唔”。

<sup>3</sup> meih 疑問文同様この文末助詞の使用も義務的で、その機能は一般に語気を和らげることとされている。

### C:[V]+唔[VO]

の3パターンが考えられるが、現代広東語では前方の目的語を省略したCのパターンが用いられる。(=例文6)そしてこのパターンは、助動詞の場合(=例文7)、目的語が文の場合(=例文8)、さらに動詞が2音節の場合(=例文9)と2音節の形容詞にも適用される。<sup>4</sup>したがって、現代広東語のYes/no疑問文の形式は、I. VP-ma、II. VP-meih、III. V-mh-VP<sup>5</sup>と総括できる。<sup>6</sup>

## 二

これに対して十九～二十世紀の資料<sup>7</sup>では、以下の6パターンが見られる。

- i) VP mh-VP
- ii) VP-mh
- iii) VP-ma
- iv) VP mh-V
- v) VP mh-chahng<sup>8</sup>
- vi) V mh-VP

Cheung(2001)は i)が固有のパターンで、ii)～vi)はいずれも i)から異なるプロセスを経て派生したものと考えている。ii)から v)までは forward deletion (前を残した削除)とでもいうべきもので、比較的早い時期に起こった。すなわち ii)は i)から最後の VP が脱落したものであり、iii)は ii)に文末助詞の a がついたものである。iv)は i)から最後尾の P (正確に言えば動詞句または形容詞句の第二音節以降)が脱落したもので、v)は i)の一種である VP mh-chahng-VP(たとえば“去過香港唔會去過香港?” 香港へ行ったことがあるか?)から最後の VP が脱落したもの(“去過香港唔會?”)である。この形式は後に“唔會”が“未”に語彙交替して今日に至っている。以上に対して vi)は backward deletion (後を残した削除)とでも言うべきもので、i)から最初の P が脱落したものである。資料から見ると 1930 年代から 50 年代にかけての比較的新しい現象であり、現代広東語でも用いられている。Forward deletion は比較的早い時期に起こったが新興の backward deletion に押されて消滅した。しかしながら今日でも ma 疑問文と、meih 疑問文としてその痕跡を残してい

<sup>4</sup>小文で以下 V-mh-VP という時、V は「助動詞を含む動詞句(または形容詞句)が2音節以上のときの第一音節」という意味であることに留意されたい。

<sup>5</sup> 動詞句(または形容詞句)が一音節の場合は V-mh-V (=例文5)のようになるわけで、V-mh-VP はこの形式も代表している。

<sup>6</sup> ma 疑問文と A-not-A 疑問文に意味の違いはない。ただし、実際の会話では A-not-A 疑問文が使用されることが圧倒的に多い。

<sup>7</sup> 1828 年から 1951 年までの 12 資料による。

<sup>8</sup> このうち、v) VP-mh-chahng (VP-唔會)は“你打定主意未會呢?”(呢は語気助詞)(もう考えを決めましたか?)(Morrison1828)、“你娶老婆未會呢?”(結婚していますか?)(Ball1907:14)、12)、“你去過香港唔會?”(香港へ行ったことある?)(O'Melia1941:262)のように完了や経験を問う疑問文で、“~未會?”と“~未?”も同類として扱う。

る。以上を図に示すと次のようになる。(Cheung2001:227 より一部改変)

		< Yes/no 疑問文の変遷 >			
		19 世紀		20 世紀	
		1800～	50～	1900～ 30～	50～ 至今日
VP mh VP	+	+	+	+	—
VP mh	+	+	+	+	減少
VP ma	+	+	+	+	+
VP mh V	+	+	+	+	—
VP mh chahng	+	+	+	+	meih meih
V mh VP	—	—	—	—	+ (40s に出現)+

### 三

さて、V neg-VP は南方に固有の形式<sup>9</sup>で、1900 年代に北方方言がこの形式を取り入れたのは西南官話との言語接触によるものだと指摘されている<sup>10</sup>。1940 年代は人口の南下により香港の人口構成が大きく変化した時代である。40 年代に広東語に V mh-VP が出現したのはさまざまな方言をもった人口流入の結果であろうか。朱德熙(1985)<sup>11</sup>は、VP neg-V は北方方言の形式で、V neg-VP は広東語を含む南方の形式だと言っているが、早期粵語資料のデータからは、VP-neg-V 型の方が古いことがわかった。

なお、Yue(1993)は、1877 年から 1938 年の 6 資料をもとに、VP-neg が広東語に固有の形式で、VP-neg-VP、VP-neg-V、V-neg-VP はいずれも言語接触による外来形式であると主張している。同氏の主張の根拠は 1877 年の資料では VP-neg が優勢で後年の資料では減少するということであるが、Cheung(2001)の使用した 12 資料のうち一番古い Morrison(1828)に VP-neg はなく、逆に VP-mh-V が使用されている。

両氏の結論が違うのは、使用した資料が違うのに加えて、Yue 氏が他の方言を視野に入れて類型論的観点から論じているのに対して、Cheung 氏は長期間の資料を用いて広東語内部の変化に焦点を当てて分析したことによるのであろう。いずれにしても、ある新しい現象が外来形式なのか、内部の他の形式から派生したものなのかという見極めはむずかしい。Cheung 氏は論考の最後で、控え目に、少なくとも言えることは広東語の Yes/no 疑問文に関して、二十世紀中旬までは基本的には前方を残した省略形であったのだ、と結んで

<sup>9</sup> ZHU, Dexi(1990). Dialectal Distribution of V-neg-VO and VO-neg-V Interrogative Sentence Patterns, *Journal of Chinese Linguistics*, 18/2:209-30.

<sup>10</sup> YUE-HASHIMOTO, A.(1993). The Lexicon in Syntactic Change: Lexical Diffusion in Chinese Syntax. *Journal of Chinese Linguistics*, 21/2:213-53.における ZHANG, Min(1990) *A Typical Study of Yes-No Questions in Chinese Dialects: A Diachronic Perspective*, Unpublished thesis. Beijing: Beijing University.からの引用。

<sup>11</sup> 朱德熙(1985)「汉语方言里的两种反复问句」『中国语文』184:10-20.

いる。それにしても現在普通に使われている V mh VP 型疑問文の歴史がこんなにも浅いものとは驚きである。